

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04577

研究課題名(和文)わが国における異年齢の保育の実践史的研究

研究課題名(英文)A Historical Analysis of Multi-Age Childcare in Japan

研究代表者

渡邊 保博(WATANABE, YASUHIRO)

佛教大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：50141552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：この研究を通して、異年齢保育への転換の背景と実践の多彩な展開に迫ることができた。同時に、異年齢保育の歴史的意義は、保育の形態・方法上の転換という観点からだけでなく、保育の「学校化」への対抗という観点から検討が必要だということも明らかにした。そこで、今日の「学校化」問題に関する先行研究の整理をおこない成果を公表した。

その際、保育の「学校化」問題に関する議論には、2つの流れ～学校教育の「前倒し」及び「福祉、保健、その他の関連領域から分離」～があることがわかった。後者に注目し、「保育所は乳幼児学校ではない」という保育所観を打ちだした保育者の実践に注目し、その実践史的検討に着手するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国では、近年の「子ども・子育て支援新制度」に連動した「保育所保育指針」等の改定に伴い、保育所は「幼児教育の一翼」「学校教育の一翼」を担うとされた。OECD加盟国でも、近年の社会的な事情を背景に保育と学校教育の制度統合と保育・教育課程改革が進み、保育の「学校化」が問題になっている。

保育の目標・内容・方法、学級編成、「場」のあり方(「生活の場」「昼間のお家」)等「広義」の保育方法に焦点化してきたこれまでの研究だけでは、保育と学校教育の関連や保育所(保育)の意義・独自性を示すことはできない。本研究は、「福祉関連領域からの分離」という観点から、保育の「学校化」問題を考える新たな材料を提供する。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the background of the transition from childcare by age to childcare of multi-ages and the various developments in practice. At the same time, it was clarified that the historical significance of multi-age childcare needs to be examined not only from the viewpoint of changing the form and method of childcare, but also from the viewpoint of countering 'schoolification' of childcare. I organized the previous research on today's 'schoolification' problem and published the results. That time, it was found that there were two streams in the discussion about the problem of schoolification: "the downward pressure of primary school approaches" and "separation from welfare, health, and other related areas". After that, the research focuses on the latter problem, paying attention to the practice of nursery teachers who have come up with the idea that a day-care center is not an infant school, and is clarifying its historical meaning.

研究分野：乳幼児保育学

キーワード：異年齢保育 年齢別保育 保育方法 場 福祉 学校化 特別扱い 生活状況

1. 研究開始当初の背景

(1) 明治以降のわが国の保育において、子ども同士の異年齢の関わりを積極的にすすめる「理念的異年齢保育」の試みはあった。しかし、異年齢の保育は、「必要悪」であり、年齢別クラス編成ができないときにやむを得ず行う「条件的異年齢」として実施されることが大半であった。実際、異年齢の保育が注目され始めた1970年代には、年齢別保育は「学校の学年別方式」(大阪市立保育園連盟保育内容研究委員会,1980)を下に降ろしたのではないかと指摘されることもあったが、その後年齢別保育は主流であり続けた。

(2) しかし、近年、異年齢保育への関心が高まり、いろいろな研究・実践が進み始めている。

その背景として、乳幼児の学びや関係性の発達にとって年齢別「横並び」(伊藤亮子,1998 / 松田道雄,2009)集団が持つ問題が顕在化し、おとなと子ども・子ども同士の関係性の新たなあり方をめざす保育が求められているということが考えられる。また、年齢別保育は、学校教育の集団編制方式に近い。この年齢別保育が問われるということは、保育の形態・方法の問題にとどまらず、保育と学校との関連が問われているのかもしれない。このことは、近年、内外において保育の学校制度へと統合とカリキュラム改編が進む中で、保育の「学校化」問題が指摘されていることと関連があるのかもしれない。

(3) 今日、異年齢の保育の多彩な展開の中で、その効果の実践分析的研究、実態把握的研究、「比較保育論」的研究、関係論的研究等が進みつつある。とはいえ、横松友義ら(2006)も指摘するように、用語及び先行研究の整理を含む異年齢の保育の「体系的研究はこれから」の段階にあり、その「歴史研究の推進」が極めて重要である。

2. 研究の目的

(1) かつて「必要悪」のように見られていた異年齢の保育(「縦割り保育」「混合保育」「異年齢交流保育」など)が、今日、子ども・家族・保育をめぐる状況の大きな変化の中で、その積極的な展開を期待され、多様な実践が全国で試行されている。しかし、このような実践の広がりにもかかわらず、異年齢の保育の「体系的」研究、特にその実践史的研究はほとんど手がついていない状況にある。

(2) 本研究では、保育の実践史的研究を通して、年齢別を基本とする保育から異年齢の保育への転換には、保育の形態や方法の変更にとどまらない多面的な意味があったのではないかと、また、保育(所保育)と学校(教育)との関係を問い直すという意味もあったのではないかとということについて検討をすすめ、「学校化」が懸念される今日の保育のあり方を考えるための研究視点・方法への手がかりを得ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 異年齢の保育に関する先行研究及び実践報告を収集し、その整理と検討を行うとともに、関連の保育学会・研究会に参加し、情報を収集した。同時に、その基礎的作業として、(a)保育が行われる「場」(「お家」「生活の場」など)のあり方に関する先行研究、(b)広く集団生活・活動における「タテ・ヨコ・ナナメ」など人間関係の意義に関する研究、(c)学校における学年制の歴史と「縦割り」編成の試みに関する先行研究、などを収集し検討を行った。

(2) 異年齢保育実践に関する著書、保育専門誌に載った実践研究・報告を収集し検討した。また、近年、年齢別から異年齢の保育に転換し、保育専門誌にその実践報告を載せている園(複数)を訪問し、保育を見学し専門的な情報提供を受けた。同時に、転換の事情とその後の実践の展開を熟知する保育者(園長・主任)に聞き取りを行い、関連の資料を収集した。ただ、園の実践をまとめ著書として出版する過程で、実践資料のそのものは整理・廃棄していることなどもあり、十分な収集はできなかった。また、近年、異年齢の保育に転換した近隣の2園が中心になり、異年齢保育への関心を有する他の園の関係者とともに立ち上げた研究会に定期的に参加し、異年齢保育への転換とその実質化をめぐる成果と課題について検討を深めた。

(3) 異年齢の保育は、保育の形態や方法の問題だけではなく、保育(所保育)と学校(教育)との関係を問い直すという意味もあったのではないかと思われたので、近年の欧米において、多様な社会的背景のもとで進みつつある保育制度改革と保育カリキュラムの改訂と保育の「学校化」問題に関する研究状況の検討を行った。また、実践のあゆみの中で「保育所は乳幼児学校ではない」と考えるに至ったある保育者の保育所観(感)に注目し、その形成過程に迫るため、聞き取り調査を重ね、保育者個人の記録とともに、勤務園の史資料を収集した。勤務園の史資料を収集し検討の対象としたのは、保育の実践は個人の「名人芸」ではなく、園として行われ、この保育者の保育所観(感)も、園の保育者たちの多様な保育意識の対立と相克の中で形成されていったと思われたからである。また、こういった保育所観(感)が形成・変容を遂げるには、相当の年数の積み上げが必要である。この保育者が、園の実践の歩みに関する資料を系統

的に整理・保存していたこともあり、園の保育の中間総括・年度末総括、各職員の年間の実践記録、クラスだより、園だより、職員会議録、事務連絡、職員・保護者アンケート、記念誌、保育雑誌や全国研修会の実践報告、刊行した書籍、論稿の草稿など、園の実践史を多面的に検討できる史資料を手に入れた。

4. 研究成果

(1) 保育・教育において、その集団を同年齢で編成するのはなぜかに関して多様な論究があり、その歴史的背景及び年齢別編成の意義と問題点に関して理解を深めた。その1つが、社会生活の中での年齢意識の生成である。つまり、「社会的文化的記号」としての年齢意識(誕生日、結婚適齢期など)の発達は、年齢規範の意味ももたされてきたという。つまり、「年齢重視の裏には、平均化する見方、つまり、同輩の者は大体においてほぼ同じとする見方が根強くはたらいっている・年齢を基準とする法律や制度化がおし進められている領域ではこの平均化がさらにより強く前提とされてきている¹⁾」という。その一方で、年齢規範意識が希薄な社会もあるという²⁾。2つめが、学校・学級史のある時点で、能力別・等級別から年齢・学年別編成への転換が進んだことである。たとえば、1840年代以降のアメリカでは、都市の学齢人口の増大と従来の学校組織の限界、1つのクラスにさまざまな年齢・体格・能力の男女生徒が詰め込まれていることから生じる問題、民主主義の価値(制度や理念)を徹底して教えるために「年齢と到達度がほぼ同じ・生徒を発達段階別に編成するクラス編成」が求められたこと、就学率の増大により年齢別のグループ化が可能になったこと、細かなクラス単位に仕切る校舎の構造と学年別編成が可能になる学校建築の進展、学年と生徒の年齢にあうような学習内容の整備等により、年齢・学年別編成が主流になっていったとされる³⁾。わが国の学校・学級史でも、その出発点は「等級制」であったが、その後年齢別の学級が成立していったという⁴⁾。3つ目が、同一年齢集団としての近代学校・学級(教師と子どもという特殊な、狭い、教育関係が中心)の成立に伴い、地域の共同体や家族における「タテ・ヨコ・ナメの人間関係」が解体されてきたことである⁵⁾。

(2) 年齢を基準としたクラス編成が近年の保育・教育問題の一因であり、この問題の解決策の1つとして異年齢による集団編成への期待が高まっているということがわかった。たとえば、年齢別集団は、その成員を過度の「競争」「選別」に追い込む機能を持つという。学校や会社は「タテとヨコ」の関係で成り立つが、子ども同士の「ヨコの関係」は、上下の差をつけずに、いつも並んで対等な関係を保っているような状態であり、「横並び」という一種の安心感をともなう平等の原理であるが、他方で、横にいる他人と比べ「隣はみなライバル」という過剰な競争心を煽ってしまうという⁶⁾。また、「同学年という枠をはめると、おとなはどうしても子どもの『できる』『できない』に目が向きやすく」なるが、「学年別の基礎集団」のもつ「学校的な“選別的まなざし”をどう緩和し、別のまなざしで子どもたちを見られるようにするか。それが、異年齢保育の重要なテーマの一つであるという⁷⁾。異年齢保育へ移行した園からも、同じ提起があった。たとえば、ある保育園が1歳から5歳までの集団編成による「きょうだい・グループ保育」に移行したきっかけは、「受験受験で、異常な競争に勝つか負けるかが、人間の価値のすべてを決めてしまうような人間観・社会観」のなかで育つことを余儀なくされる現代社会・家族の中で、「年齢別保育だけでは、どうしても子ども同士の関係が横並びで、『できる、できない』の競争と点数化による比較対象にされがち」であり、「きょうだいでも互いに育ち合う関係をつくるのがむずかしくなっている」と考えたからである⁸⁾。あるいは、いじめや不登校という教育問題は、年齢別「学級」という枠組みがもたらす体系的な問題であり、「子どもたちがみな同一年齢の枠のなかに囲われて生きているという・・構造の問題」だという見方もある⁹⁾。学級史の研究者からも、同様の問題提起がある。つまり、今日の教育問題の議論は、「学級が前提」で「学級」の存在を自明視しているため、「学級崩壊」が問題にされる。しかし、同年齢児・担任・独立した教室や空間で学習し生活するという「学級」とは近代学校に特有の組織であり、その特徴とともに限界もあり、その学級に子どもたちが「なじめない」のはなぜかを「説明する作業」が、いま求められているという¹⁰⁾。

(3) 年齢別が主流であった保育界においても、子どもたちの育ちの変貌(「気になる子」など)に直面して、「年齢」を基準にして子どもをみることの是非が問われた。たとえば、近年の子どもの育ちの変化の中で、年齢別保育の求めるものと子どもの姿とのズレが大きくなり、「人とかかわりにおいては自分がこれまで捉えてきた当該年齢の姿よりずっと幼い、むしろ後退しているのではないかと感じられるなど、こちらの発達の枠組みをもっと広げていかないと対応できない姿が増えてきている」という¹¹⁾。あるいは、年齢別の保育では、子どもの理解が一面的になりがちだということが自覚され、異年齢保育への関心を高めていった。たとえば、「5歳の保育が年々『きつく』なっている」なかで、「『手のかかる』5歳児が0歳児には『やさしい』といわれるので、子どもが多面的にみえる保育を考えた」園があった¹²⁾。また、「年長児になってもべったり甘え、抱っこやおんぶをせがむ」など保育が大変になっている中で、「2歳児が大きい子の部屋へあそびにきたとき(年長児が)やさしい眼差しで小さい子を見て」いるので「部屋の空気も和ぐ」、2歳児もあちこちを探索したり、大きい子たちのしていることをじっと観察しているので「2歳児の世界も大きく広がる」と考え、2~5歳の異年齢保育を始めた園もあった¹³⁾。

(4) 子どもの育ちの変化は、それまで当然視していた年齢を基準とした目標意識(5歳児らしく)を問い直していくことになった¹⁴⁾。というのは、「5歳児らしくとか、5歳なんだから・・ちゃんとするべき」という期待のかけ方(目標意識)は、保育者を主体とし子どもを対象にしてしまう¹⁵⁾。同時に、「期待されたよりも遅い・・あるいは期待と異なった発達」の姿を見せる「5歳児らしく」ない子と保育者の間には「必然的に緊張関係」が生じ、「子どもの固有な生を、不当に狭めてしまうおそれ」もあるからである¹⁶⁾。こうして、「(学校と)同じように年令別にやるのが・・あたかも到達目標として捉えられ」る保育が問題になった。その問い直しの中で、「『5歳児にもなって』というより、その子がどうであるのかのほうがより重要」であると考え、「3歳から5歳の幅の中で子どもを認め」「自分で選び、自分で決める」ことを保障する「保育の個性化」に踏み切った園がある¹⁷⁾。あるいは、「歳とはこういう年齢、当番・活動のルールはこう、けんかの仲裁はこんな風に」というような「(年齢別)保育の中のたくさんの『こうでなければ』というおとなの考え方を柔軟にしてくれ」たところに、異年齢保育の意味を見出した保育者もいた¹⁸⁾。また、「みんな(活動や行事の)目的を共有し、励まし認めあい、共に頑張り、自信と仲間関係を深める」ことになりがちな「年齢別」保育を子どもの視点から問いなおし、1人ひとりがやりたいことをそれぞれのペースでやれる「幅と間」を大切にする、「どの子も年齢に関係なく」自分の大好きな事を自分のペースで充分楽しみ、試し、自ら次の一步を踏みだす力をためることなどに、異年齢保育の意味を見出した園もあった¹⁹⁾。

(5) 異年齢保育の進展に伴い、「居場所」づくりという観点から、園の保育空間のあり方を検討した建築学的・保健福祉学的研究もあった²⁰⁾。

(6) 以上のことから、「年齢」を基準にした同年齢保育・教育は、年齢「らしい」目標や行動をみんなが「同じ」ように達成すること「規範」とするような保育・教育を生み、1人ひとりの子どもの育ちや思いとのズレを拡大させる強力な要因の1つとなったといえる。その点に注目した保育者たちは、異年齢保育へと期待を寄せていった。また、年齢別保育・教育は学校・学級システムと「構造」的な関係があることも明らかになった。その点で、近年、保育の「学校化」が懸念される内外の状況(特に、欧米の保育制度改革と保育カリキュラムの改訂、わが国における保育所保育指針・幼稚園教育要領等の改定後の実践など)が、クラス編成を含む保育のあり方という問題を引き起こすのかについて注意が必要である。この点と関わって、保育の「学校化(schoolification)」をめぐる内外の研究状況を概観するとともに、保育(所保育)と学校(教育)の関係史に関する先行研究の整理を試みた。保育の「学校化」に関する内外の研究状況についていえば、近年のOECD加盟国におけるこの問題の論点の1つは、「乳幼児の教育学に、学校システムのアプローチ(教室の構造、カリキュラム、教授法、子どもとスタッフ比率、および子ども期の概念)を前倒しにしていくような圧力がかかること」である²¹⁾。

(7) わが国における保育・幼児教育と学校教育との関係史をめぐる先行研究を検討した。わが国の保育(研究)者は、保育・幼児教育の「学校化」問題に向き合ってきた。その際、保育の計画(目標、内容)や方法、学級編成原理、「場」のあり方(「生活の場」「昼間のお家」など)に注目して、学校(教育)と異なる保育(所保育)の独自性を探求してきた。つまり「広義」の保育方法に注目して、両者の関係を問い続けてきたといえる²²⁾。しかし、「広義」の保育方法に注目するだけでは、学校に対する保育所や幼稚園の独自性を示すことはできないように思われた。というのは、保育所や幼稚園の保育「方法」原理は学校教育の「方法」原理でもあり、学校の教育「方法」が保育所や幼稚園の保育「方法」に影響を及ぼしてきたからである。たとえば、「教科学習」的な内容観(感)、「一斉」に「すべての幼児が行うよう」に促すという方法観(感)が、現場の保育者たちの「構え」「体質」にまでなっていたという史実もある²³⁾。あるいは、保育所保育において、異年齢への貴重な試みはあったものの、「小学校のクラス編成を当然そうでなければならぬかのように無批判に、受けとって」同年齢クラス編成が行われてきたという指摘もある²⁴⁾。「生活の場」という保育所・幼稚園の捉え方については学校も同様であり、「給食、清掃活動のような日常生活に不可欠な活動のみならず、誕生会、お楽しみ会、クラス対抗競技など、さまざまな活動が・・重層的に組合わされ」た「自己完結的な生活の場」²⁵⁾であったからである。

(8) じつは、保育の「学校化」については、「保育方法」から見た「学校化」とともに、保育所が学校教育(制度)に統合されることに伴うリスク(「福祉・・領域から分離」することに伴う「学校化」という2つの問題があった。後者の「福祉・・領域からの分離」²⁶⁾がもたらす「学校化」問題については、まだ検討が始まったところであるように思われた。この点と関わって、近年の学校論の研究、特に福祉(貧困)問題と向き合う学校のあり方に関する研究に注目した。その検討によってわかったのは、「みんな同じ」²⁷⁾という学校の制度・実践原理は、「教育の機会均等」の実現という面²⁸⁾と「特別扱い(しない)」²⁹⁾という面を持ち、「特別扱い(しない)」ことによって子どもと家族の生活問題を見えにくくする、あるいは、「特別扱い」によって生活問題を「個人化」し、その「『社会的差異』を不可視化」³⁰⁾するということである。しかし、保育・福祉において、生活状況に応じた「手厚いケア」は「特別扱い」ではなく、「平等」を旨とすることである。その点で、「福祉の平等は学習機会の平等とは本質的に違う」のであり、「みんな同じ」という学校の制度・実践原理は、「福祉としての保育」になじまないところがある。その点で、保育の「学校化」は危険であるといえる。今後、「福祉・・

領域からの分離」という観点から、保育の「学校化」問題について歴史的研究を試みたい。その際、「『生活の条件』『生活の問題』というものを全く無視して学校の教育は行われていく」が、保育所は「(生活条件、経済的条件などの違いを)そのまま受け入れながら保育する」と対比的にとらえ、「保育所は乳幼児学校ではない」とみるに至ったある保育者の所論に注目し、その保育所(保育)観の実践史的検討を通して、保育の集団編成原理を考える視点を探求していきたい。

<引用文献>

- 1)岡本夏木(2000/2003)記号としての「年齢」：その社会的文化的機能.年齢の心理学-0歳から6歳まで.ミネルヴァ書房.1-24
- 2)バーバラ・ロゴフ(2006)文化的営みとしての発達.新曜社.211-217,262-267
- 3)チュダコフ(1994/2015)年齢意識の社会学.法制大学出版社.45-51
- 4)森一平(2007)学級社会学の可能性-歴史研究と相互行為研究の邂逅一.東京大学大学院教育学研究科紀要.47
- 5)宮澤康人(2011)<教育関係>の歴史人類学.学文社.17-21
- 6)松田道雄(2009)関係性はもう1つの世界をつくり出す.新評論.130-135
- 7)川田学(2015)発達心理学的自由論(第12回).現代と保育.92.ひとなる書房.74-89
- 8)伊藤亮子(1998)異年齢・きょうだい保育の創造へ.ちいさいなかも.373.草土文化./東京・こくま保育園(2002)きょうだい保育の園舎づくり.草土文化.11-12
- 9)浜田寿美男(2015)<子どもという自然>に出会う.ミネルヴァ書房.55-56
- 10)柳治男(2005)<学級>の歴史学.講談社選書.メチ工.1-5
- 11)金澤妙子ほか(2009)演習/保育内容総論.建帛社.130-132
- 12)伊藤シゲ子(2005)異年齢保育の四季.季刊保育問題研究.212
- 13)鍋田まゆ(2013)過疎地の行事と保育計画-異年齢保育の実践を通して考える.季刊保育問題研究.260
- 14)嶋さな江らへの聞き取り調査(2007.7.6).
- 15)佐藤学監修(2005)学びとケアで育つ.小学館.271-272
- 16)ボルノウ(1969/1989)教育を支えるもの.黎明書房.134
- 17)藤森平司(2000)21世紀型保育のススメ-たてりではない異年齢保育.世界文化社.1-24
- 18)小柳由美子(2013)おとなも子どもも「こうでなければ」から抜け出す異年齢保育.現代と保育.86.6-19.
- 19)渡辺智美(2015)異年齢保育の学びから生まれた豊かな育ち.季刊保育問題研究.272.94-97 / 小山逸子(2013)共に暮らす保育(異年齢保育)は安心して穏やかな暮らしのある保育.季刊保育問題研究.260.246-249 / 西村侑子(2014)仲間と育ったTのこころ.季刊保育問題研究.266.106-109
- 20)栗原知子・桜井康宏(2010)「きょうだい保育」を導入した保育園の子どもの発達に関する調査研究(2):「いえ」型保育空間における園児の居室利用実態について.日本建築学会北陸支部研究報告集.53.623-626 / 丸山昭子・安梅勅江(2000)夜間保育サービスの今後の課題に関する研究:施設長・保育専門職のグループインタビューを通して.日本保健福祉学会誌.7(1).41-47
- 21)Kaga,Y.,Bennette,J.,& Moss,P.(2010)Caring and Learning Together.Paris,UNESCO.8-9
- 22)福元真由美(2016)保育実践と保育方法の展開.保育学講座 保育学とは-問いと成り立ち.東京大学出版会.125-145
- 23)田甫綾野(2004年)昭和31年版幼稚園教育要領に対する保育者の受けとめ方-ライフストーリーにみられる保育者の日常的「構え」を通して-「保育学研究」42(2).80-91 / 田甫(2006)昭和30年代の保育実践はなぜ「小学校的」と評価されたのか-幼稚園の「地位」向上と保育者の「構え」をめぐる.日本保育学会第59回大会発表論文集.668-669
- 24)平井信義(1973)混合保育をみなおそう.保育の友.全国社会福祉協議会.12-15
- 25)柳治男(2005)<学級>の歴史学.講談社選書.メチ工.19-22,148-150
- 26)Bennett,J.&Kaga,Y.(2010).The integration of Early Childhood systems within Education.International Journal of Child Care and Education Policy.4(1).UNESCO.35-43.
- 27)苅谷剛彦(2005/2017)学校って何だろう.筑摩書房.102-104 / 苅野一徳(2019)「学校」をつくり直す.河出新書.18.39-40 / 埋橋孝文(2015)子どもの貧困とレジリエンス.埋橋他編著.子どもの貧困/不利/困難を考える.ミネルヴァ書房.21
- 28)刈谷剛彦『教育と平等』中公新書.2009.124-135
- 29)盛満弥生(2011)学校における貧困の表れとその不可視化-生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に.教育社会学研究.第88集.273-294 / 盛満弥生(2015)学校関係者の貧困認識の特徴とそれが提起する課題.教育.837.43-51
- 30)原田琢也(2014)子どもの貧困と「特別扱いしない」日本の共同体的な学校文化.金城学院大学論集.社会科学編.10(2).94-109

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡邊保博	4. 巻 277
2. 論文標題 <生活と生活習慣>のとりえ方の変容が保育計画に提起するもの	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 季刊保育問題研究	6. 最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊保博	4. 巻 16
2. 論文標題 保育の“学校化”問題に関する一考察 福祉としての保育の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佛教大学社会福祉学部論集	6. 最初と最後の頁 95-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 渡邊保博	4. 発行年 2016年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 30
3. 書名 日本保育学会（編）保育学講座3 保育のいとなみ 第3章	

1. 著者名 河本ふじ江, 河野友香, 清水民子, 清水玲子, 横井洋子, 渡邊保博	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新読書社	5. 総ページ数 179
3. 書名 子どもの生活と長時間保育 生活のリズムと日課	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----